ストーリーの構成文化財一覧表

番号	文化財の名称	指定等の状況	ストーリーの中の位置づけ	文化財の所在地
①	鳥羽・志摩の海女漁の技術	国重要無形民俗	三重県鳥羽市及び志摩市に伝承されている女性たちによる素潜り漁技術。当地の海女漁は、特に伊勢神宮との関係性も含め、古来より継承され、従事者が全国で最も多い地域である。この地域の沿岸部では、各地で海女のいる風景をみることができる。	鳥羽市 志摩市
②	白浜遺跡出土遺物	―	古来からこの地域が豊かな海産物に恵まれ、潜水漁が行われるなど、後の御食国となる一因を感じられる資料。縄文晩期から古墳時代にかけての遺跡で、多くのアワビの貝殻やアワビオコシと考えられる骨角器が出土しており、潜水漁がおこなわれていたことを示す遺跡である。	鳥羽市
③	国崎の熨斗鰒づくり	県無形民俗	神饌に関する文化財である。志摩国は「御食国」として古くから、朝廷から重要視されてきた地域であり、倭姫命が国崎の潜女が献上したアワビが美味であったため、国崎を御贄所にしたという伝承をもつ。現在でも国崎では、伝統的技法で調製された鰒（アワビ）（身取鰒、玉貫鰒）を伊勢神宮に奉納している。	鳥羽市
④	伊勢湾・志摩半島・熊野灘の漁撈用具	国指定重要有形民俗	海女の道具 233 点をはじめ、三重県の漁村から収集された漁撈用具や漁村の民俗資料など 6,879 点がある。県内の漁業文化・歴史を知るうえで重要な民俗資料群である。なお、収蔵する海の博物館では、海女についての詳しく紹介した展示が行われているほか、建物は建築家内藤廣氏によるモダンなデザインである。	鳥羽市

⑤	しろんご祭	市指定無形民俗	各地で受け継がれる信仰と多様なまつりの一つ。菅島(すがしま)で例年7月 11 日の直近の土曜日に行われる。しろんご浜に磯着姿の海女が集まり、普段は禁漁区の浜に一斉に潜り、雌雄一対のアワビをとる。最初にとれた雌雄のアワビは「まねきアワビ」と言われ、白髭(しらひげ)神社に奉納され、海上安全・豊漁を願い、祈りを捧げる。	鳥羽市
⑥	国崎(くざき)のノット正月(しょんがつ)	国記録選択 (無形民俗)	各地で受け継がれる信仰と多様なまつり。1月 17 日に行われる正月神を藁船(わらぶね)に乗せて送る行事。海女を含めた女性が中心となって行われる点でも珍しい。	鳥羽市
⑦	青峯山正福寺(あおみねさんしょうふくじ)	― ※大門は市指定 (建造物)	江戸時代、廻船業が繁栄を遂げる中で、「青峯に参ると風雨の難を免れる」という「青峯信仰」が広がり、現在も海女をはじめとして伊勢湾周辺の漁業に関わる人々の厚い信仰を得ている聖地である。天保 13 年築の大門には立川流の彫刻が使われ、「かくれええび」と呼ばれる海老や魚の彫刻など海にまつわる彫刻も含む。海難者が奉納した絵馬もおもしろい。	鳥羽市
⑧	海士潜女神社(あまかずきめじんじゃ)	―	倭姫命にアワビを献上したと伝えられる伝説の海女「おべん」を祀る。年初めの漁が始まる前に海女たちは必ずここに参る。	鳥羽市
⑨	潜(かず)き下(お)り	―	新しい年の海女漁が始まる前に、八大龍神(はちだいりゅうしん)に操業安全と大漁を祈る行事。八大龍神の掛軸を飾り、一対のアワビが供えられ、海女が餅と小石を供えて祈る。	鳥羽市
⑩	石神さん	―	信仰の場のひとつ。相差(おうさつ)町の氏神である神明神社の参道に祀られた石神さんは、女神とされ、海女に信仰されてきた。女性の願い事なら一つ叶えてくれるといわれ、多くの女性参拝者が訪れる。	鳥羽市

⑪	神島八代神社（かみしまやつしろじんじゃ）	―	海女は文芸の世界でも描かれている。三島由紀夫の代表作の一つである小説「潮騒」では、登場人物「初江」は海女として描かれており、小説に登場する場所も現存している。八代神社はその一つで、物語の最後に新治と初江がこの場所で結婚の報告をするほか、眺めが最も美しい場所の一つであると紹介している。	鳥羽市
⑫	監的硝（かんてきしょう）	―	三島由紀夫の小説「潮騒」で、海女である「初江」が、嵐の日に新治とお互いの気持ちを確かめ合うクライマックスの場面の舞台である。昭和４年に陸軍の大砲着弾点確認のために建てられた。ここからは伊良湖岬を一望できる絶景ポイントである。	鳥羽市
⑬	ニワの浜	― （※カルスト地形は市指定）	海女は文芸の世界でも描かれている。三島由紀夫の代表作の一つである小説「潮騒」には、登場人物「初江」は海女として描かれており、アワビとり競争の場面で描かれた場所である。海女が漁を行うスポットであるほか、浜を見下ろすように石灰岩でできたカルスト地形が露出している。	鳥羽市
⑭	答志島（とうしじま）の細い路地裏（ろじうら）	―	海女の住む離島の漁村風景。迷路のように入り組む路地で、じんじろ車と呼ばれる手押し車が活躍している。各家には、家内安全と大漁を祈願するため、八幡祭で持ち帰った炭で「まる八」が書かれた戸板を見ることができる。	鳥羽市
⑮	志摩半島の生産用具及び関連資料	国登録	志摩半島で収集された漁の道具や真珠養殖などの資料が含まれ、海女の道具も含まれている。	志摩市
⑯	伊勢神宮へのアワビ奉納	―	志摩国は「御食国（みけつくに）」として古くから、朝廷から重要視されてきた地域であり、現在でも伊勢神宮へ貢進しているアワビをはじめとする海産物には海女が大きな役割を果たしている。	志摩市

⑰	潮(しお)かけ祭り (大島(おおしま)祭り)	―	各地で受け継がれる信仰と多様なまつり。鎌倉時代から続くといわれる祭りで、海女や漁師が海の安全と大漁を祈願した後、船同士が海水をかけあうことから「潮かけ祭り」と呼ばれる。	志摩市
⑱	小島(こじま)祭り(浜祭り)	―	各地で受け継がれる多様なまつりの一つ。海女が大漁と海上安全を祈り、わらで作った御舟を布施田の中の浜から海へ流す。海女はこの日、日待ちといって漁を休む。	志摩市
⑲	浜清め	―	各地で受け継がれる多様なまつりの一つ。昔、片田の麦崎(むぎざき)の竜宮井戸と呼ばれる磯で、9人の若い海女が潜っていたが、どうした訳か戻ってこなかった。そのため、片田の海女は旧暦6月13日を「竜宮日待ち」として、一日漁を休みとし、今も、供養の祀りを行っている。海の安全と大漁、海で亡くなった海女の冥福を祈る神事。	志摩市
⑳	石経(いしぎょう)おらし	―	小石に般若心経の文字を書いて海に沈め、海上安全などを祈る行事。海女が浜から海に向かい、海上安全と豊漁を祈って石経を投げる。	志摩市
㉑	伊雑宮(いざわのみや)	―	志摩地域で受け継がれる信仰の場である。志摩市磯部町に所在する伊勢神宮の別宮。天照大御神の御魂をお祀りし「いぞうぐう」とも呼ばれる。古くから「遥宮」として崇敬を集め、地元の人々によって海の幸、山の幸の豊穣が祈られてきた。	志摩市
㉒	爪切不動尊(つめきりふどうそん)	―	弘法大師が自らの爪で刻んだという不動明王が祀られ、海上安全、大漁を願う海女や漁師らの信仰を集めている。	志摩市
㉓	石仏(いしぼとけ)(潮仏(しおぼとけ))	―	御座港の一角に潮の中に立つ仏様がある。下半身の病や安産祈願にご利益があるといわれ、海女の信仰が厚く、お参りする姿がみられる。	志摩市

㉔	安乗(あのり)の人形芝居(にんぎょうしばい)	国重要無形民俗	各地で受け継がれる多様なまつりの一つ。安乗地区を中心とした有志による三人遣いの人形芝居。元禄時代に始まり、大正末期に中断したが、昭和25年に復活した。毎年、9月15・16日に行われる。地元には戦国武将の九鬼嘉隆(くきよしたか)が、文禄の役での海上安全と勝利を祈願して、その成功を祝して人形芝居の実施を許可したという伝承が残っている。また、1月2日に舞い納められる式三番は大漁を祈願するものである。海の安全と密接に結びついた人形芝居は海女たちの娯楽として楽しまれているとともに、信仰を集めている。	志摩市
㉕	磯部(いそべ)の御神田(おみた)	国重要無形民俗	各地で受け継がれる多様なまつりの一つ。毎年6月24日に、磯部町の9地区が7年ごとの輪番で実施する。漁業者を中心とした裸男が、航海の安全や豊漁を願い大団扇をつけた忌竹(いみだけ)を奪い合う竹取り、田楽にあわせ伝統的な衣装で行う田植え、伊雑宮まで唄をうたい進む踊り込みなどが行われる。 「七本鮫の磯部さん参り」という言い伝えで漁師が誤って7匹のうち1匹の鮫を殺してしまった伝承から、この日は「ゴサイ」と呼ばれ、海女たちは漁に出ず、伊雑宮に参拝する。	志摩市
㉖	波切(なきり)のわらじ曳(ひ)き	県無形民俗	各地で受け継がれる多様なまつりの一つ。9月の申の日に行われる。稚児の踊りとともに太鼓、笛の音にあわせ祭文が読誦された後、大王島の方角に稚児の手で2m余り大わらじが曳かれる。その後、大わらじは若者に担がれて、須場(すば)の浜から海に流される。海の安全と大漁を祈願する神事で、海女たちの信仰も厚い。	志摩市

㉗	リアス海岸と真珠養殖の筏（いかだ）の景観	―	複雑な海岸線に真珠筏が浮かぶ美しい風景は志摩半島を象徴する景観である。明治から昭和30年代まで、養殖に使うアコヤ貝の採取は海女が行っていた。志摩半島の沿岸のリアス海岸では、海女漁が行われている。	志摩市
㉘	麦埼灯台（むぎさきとうだい）	―	昭和50年（1975）に建てられ、志摩半島の最南端に位置する。海から自分の位置をとらえなくてはならない海女たちにとって、陸上の重要なランドマークとなっている。灯台周辺では美しい景観とともに、海女の磯笛を聞くことができる。	志摩市
㉙	大王埼灯台（だいおうさきとうだい）	国登録	リアス海岸の大王崎（だいおうざき）に昭和 2 年(1927)に建てられた。総高 23mで、扇形に配した列柱で付属舎バルコニーを支え、入口には古典主義的デザインを施す特徴的な外観である。海から自分の位置をとらえなくてはならない海女たちにとって、陸上の重要なランドマークとなっている。参観灯台となっており、登ることができ、天候が良ければ海女漁の様子を見学できる。	志摩市
㉚	波切（なきり）の町並み	―	海女たちが暮らす漁村風景。狭い石畳の坂道が続き、海からの強風を防ぐために高い石垣や防風林で家並を囲むのが波切集落の特徴である。江戸時代のみごとな石垣も残されている。昭和初期には波切の石工（いしく）が全国各地に赴き石垣造りをおこなった。石垣の間を縫うように進む原動機付自転車に乗った海女たちの姿を見ることができる。その町並みは大王埼灯台とともに、画家たちが風景画を描く人気のスポットとなっている。漁港から灯台にいたる坂道には、干物屋や土産物屋が立ち並ぶ。	志摩市

㉛	安乗埼灯台（あのりさきとうだい）	国登録	リアス海岸の安乗崎（あのりざき）にあり、昭和23年(1948)に木造の灯台から建替えられた現在の灯台は、総高 16m、白色の鉄筋コンクリート造で円筒形の灯室、角柱形の灯塔、方形の付属舎で構成されている。装飾要素を排した幾何学的構成を特徴とする建造物で、岬の歴史的景観に寄与している。海から自分の位置をとらえなくてはならない海女たちにとって、陸上の重要なランドマークとなっている。登ることができ、天候が良ければ海女漁の様子や灯台の脇を抜けて海岸へと出漁する海女たちの姿を見ることができる。	志摩市
㉜	旧越賀村郷蔵文書（きゅうこしかむらごうくらもんじょ）	—	海女の歴史について知ることのできる文化財である。 志摩市志摩町越賀が越賀村であったころの、江戸時代から近代の多数の文書が含まれる。当時、海女が西日本の各地および朝鮮半島に出稼ぎに行ったことや当時の海女の実態を記した資料を含んでいる。漁の磯場を記載した地図や村の土地利用、地震の記録なども含んだ、近世以降の志摩地域の歴史を伝える重要な記録である。	志摩市
㉝	ドーマン・セーマン	—	海女が頭に巻く磯手拭いには、星形の印（セーマン）と格子状の印（ドーマン）が貝紫で染めたり、刺繍されている。これは、海女たちが危険から身を守るためのまじないである。陰陽道と関係するといわれ、セーマンは安倍清明、ドーマンは芦屋道満の名に由来するといわれている。	鳥羽市 志摩市